巻頭言

トランプ勝利の対立軸を勝手に分析する自由

～アメリカの分断に関するアメリカ発の本を読む～

岡安 喜三郎（協同総研特任顧問）

昨年（2024年）のアメリカ合衆国（以下「アメリカ」）大統領選挙でトランプ氏が返り咲き、世界にかなりの衝撃を与えている。今年１月20日の就任後、地球存亡に関わるパリ協定からの離脱やWHOからの離脱に直ちに署名し、「不法移民」対策、外交の武器に関税政策を使い「関税大好き」と言って憚らない。

建前の『三権分立』として、予算、条約などは議会承認事項ではあるが、もともと様々な抜け道が作られている上、この２期目はいわゆる『トリプルレッド（大統領府、議会両院、保守派多数の連邦最高裁判事）』が達成されており、『三権分立』のチェック機能は大きく失われ、トランプの「独裁政治」が容易に進行することになるであろう。人事も忠誠心軸の側近登用となり、それは１期目に比べてかなり危険度が増していると予測される。

トランプ大統領に対しては不安と嫌悪の評価がはびこっているが、とは言ってもそれはアメリカの選挙手続きによって選出されたことには間違いない。ということでトランプ氏が挑戦した３回の大統領選挙一般選挙の上位２人の一般選挙得票率と獲得選挙人数をみると、以下のようである。

この大統領選の結果という前提認識に立って２つの本を改めて読んでみた。

a）*“HOW DEMOCRACIES DIE”, 2018*（邦訳『民主主義の死に方』（新潮社刊））

b）*“STOLEN PRIDE — LOSS, SHAME, AND THE RISE OF THE RIGHT”*（The New Press, 2024）

a）の『民主主義の死に方』は2016年秋のトランプ大統領の誕生に独裁者としての危機感を抱いた２人のハーバード大学教授が、アメリカ以外の独裁国の分析を含めて、なぜそうなったのか、アメリカの今後の方向を（特に民主党に期待して）執筆し、2018年に刊行された本（邦訳も同年９月に刊行）だが、南北戦争、第二次世界大戦後の赤狩り、公民権運動を通じた、アメリカの政治史（共和党vs民主党の政党史）のダイナミズムも描かれている。白人が少数派になる危機感と恐れ。そしていまや、二大政党は「人種」と「宗教」による分断となっていると、筆者は語り、ここの克服を訴える。

ともあれ、「現代の民主主義の死は選挙から始まる」や、「柔らかいガードレール」とか、「どうやって民主主義を破壊

〔FEC（Federal Election Commission；連邦選挙委員会）資料より〕

2016 年（一般選挙：2016 年 11 月 8 日施行、選挙人選挙：2016 年 12 月 19 日施行）

大統領候補	政党	獲得選挙人	一般選挙得票数	同得票率
ドナルド・トランプ	民主党	304	62,984,828	46.09%
ヒラリー・クリントン	共和党	227	65,853,514	48.18%
その他候補者合計	―――	―――	7,830,934	5.73%

2020 年（一般選挙：2020 年 11 月 3 日施行、選挙人選挙：2020 年 12 月 14 日施行）

大統領候補	政党	獲得選挙人	一般選挙得票数	同得票率
ジョー・バイデン	民主党	306	81,283,501	51.31%
ドナルド・トランプ	共和党	232	74,223,975	46.85%
その他候補者合計	―――	―――	2,922,155	1.84%

2024 年（一般選挙：2024 年 11 月 5 日施行、選挙人選挙：2024 年 12 月 16 日施行）

大統領候補	政党	獲得選挙人	一般選挙得票数	同得票率
ドナルド・トランプ	共和党	312	77,302,580	49.80%
カマラ・ハリス	民主党	226	75,017,613	48.32%
その他候補者合計	―――	―――	2,918,109	1.88%

（注１）2024 年は州選挙委員会集計の合算
（注２）「その他候補者」は数十人にも上るのがまたアメリカらしい「立候補の自由」の保証なのであろうが、ここの主題ではないので略させて頂く（実は物凄く興味のある補完制度・慣習である）。

するか」などは刺激的であるとともに、単にアメリカだけの話ではなく、ここには、私の生まれた1948年から49年に上下巻で刊行された文部省著作教科書『民主主義』と共通点があることに新鮮な驚きを感じた（「角川ソフィア文庫」として平成30年に初版発行）。プロパガンダという思想攻勢と民主主義のたたかいである。日本の民主主義に対する警告でもある点が無視できない。

著者は親民主主義勢力の結集について「最も効果的な連携が生まれるのは、多くの問題について異なる――あるいはまったく反対の――意見をもつグループが集まったときだ。つまり友人同士ではなく、敵同士で築かれた協力体制である」（新潮社版p.265）と、いわば理想を述べたが、これは返り咲き後のトランプからしたら「何を寝ぼけたことを」ということになっている。

一方でb）*“STOLEN PRIDE— LOSS, SHAME, AND THE RISE OF THE RIGHT”*（仮訳『奪われたプライド～喪失、羞恥、右派の台頭』）は、2024年９月に刊行された。すなわち大統領一般選挙（11月５日）の前に発売されたものである。著者はカリフォルニア大学バークレー校教授。遠くアパラチア山脈の西側麓、パイクビルに数年間フィールドワークに入り上記のような表題の本を書き上げた。パイクビ

ルは、ケンタッキー州第５選挙区（KY-５）内に位置している。同選挙区は、全米435選挙区〈下院議員数〉のうち２番目に貧しく、最も白人が多い選挙区でもあると書かれている。この都市はかつて、繁栄した炭鉱地帯の中心地だった。

「私たちは国の明かりを灯し続けてきたんだ！」「第二次世界大戦の燃料を供給したんだ！」確かに、かつては忙しい列車が、町の中央を通る鉄道に沿って、周囲の山々から採掘された大量の黒い金を産業化が進むアメリカの口を開けた場所に運ぶために、シューシューとキーキーと音を立てていた。プライドの象徴である。

しかし、現在では石炭は撤退し、麻薬が流入し、この地域は苦境に立たされている。「人々はここの苦境をあまり知らないんだ」とある人物は説明する。「そうでなければ、私たちのせいにするんだ」。プライドが奪われ苛立ちが募ってきた。パイク郡（カウンティ）の有権者はかつて、ルーズベルト、ケネディ、ビル・クリントンの民主党だった。しかし、この郡は今や、国内で最も急速に共和党支持にシフトした５つの郡のうちの１つとなった。

白人至上主義者の抗議活動は、全国各地で勃発していた。 2000年に南部貧困法律センターはヘイト団体を599と数えたが、2017年時点でその数は954に増加していたという。このような背景でこの本は書かれている。ノートなどを含めて380ページに及ぶ書籍（本文だけでも260ページ超）、やはり、アメリカの分断、そしてその克服がキーワードである。ぜひ読んでほしい本である。